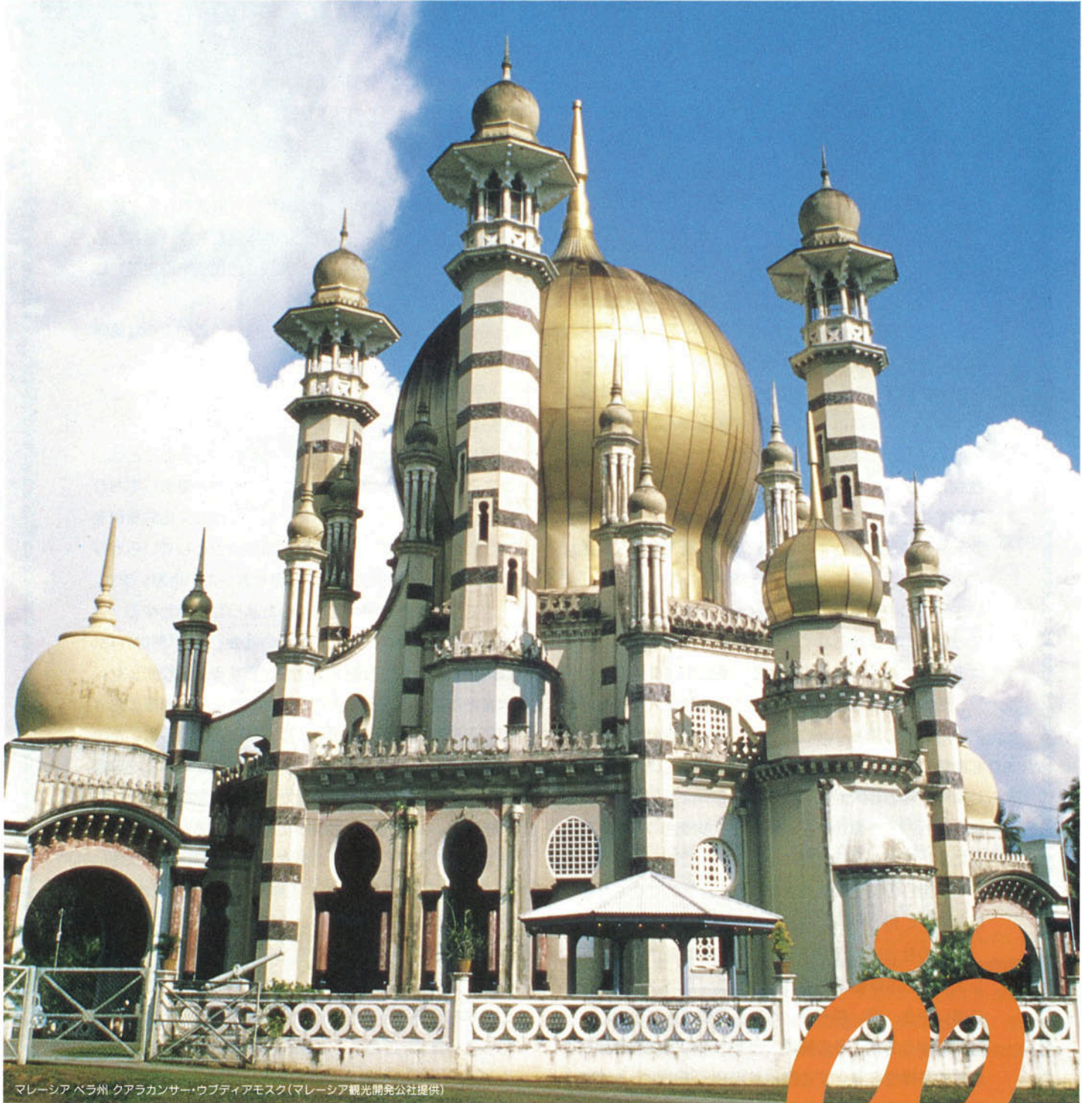


Asian Breeze



マレーシア ベラ州 クアラカンサー・ウブディアモスク(マレーシア観光開発公社提供)

いま、女性たちは —WOMEN TODAY—……………2
 設立1周年記念座談会……………3
 UNICEF協会 東南アジアスタディツアー……………10
 アジア各国“風”事情……………12
 フォーラム事業……………14
 フォーラムの窓……………15



KFAW

OCTOBER 1991 No. **3**
 設立1周年記念号

いま、女性たちは—WOMEN TODAY—



お茶の水女子大学
女性文化研究センター教授

原ひろ子

日本では、明治維新以来、欧米に追いつこうということが、社会全体のテーマとなっており、そして、個人の人生の目標となっている場合が多かったようです。このような傾向は日本だけではありませんでした。科学技術を革新し、工業における生産性を高め、人びとの「生活水準」が上がるようになることが、地球上のほとんどの社会で「正しいこと、よいこと」とされ、「進歩」とは「西歐化すること」と同義語になっておりました。そして、欧米系のことばを話すこと、欧米の小説・音楽・絵画などの芸術に通じること、欧米風の住宅に住むことが、「よい生活」の中の重要な要素となってきました。これらのことは、申すまでもなく、それ自体、決して悪いことではありません。まわりを眺めて、その利点に気づいた結果、それを取り入れていくということは、人間の生活において当然の営みであります。しかし、19世紀から20世紀中葉にかけて、地球上の多くの社会で人びとが陥ってしまった落とし穴がありました。それは、「欧米化」にあまりにも力点が置かれ、人間の持つ多様性の豊かさを大切にす気持ちを棚上げにしてしまったことでした。そして、自らの文化伝統を含め、欧米以外の文化を「遅れたもの」と見る傾向が生じたことです。

日本の社会は島国であるという地理的条件もあってでしょうか、世界各国の中でも、特に、「国をあげて、欧米に追いつき、追い越そう」という目標が人びとの心に浸透したようです。その結果、日本の中の民族的多様性や地域的多様性を無化する方向に走り、「日本は、一言語・一民族・一文化の社会である」という虚構が形成されるに至りました。それと同時に、「欧米は、日本として見習うべきもの、欧米以外の外国は、日本より遅れているもの」というふうな、上下の一直線をなすモノサシで進歩の度合いをはかる癖が定着していきました。その結果、欧米以外の社会、すなわち、アジアやアフリカなどへの

関心の持ち方は、薄弱になり、無知に近づく傾向を示すに至ったのだと思われます。

18世紀、19世紀そして20世紀前半にかけて、欧米の人びとも、自国が産業革命を経て、その工業生産性を高め、軍事力を増強して、地球上における政治的影響力を拡大することに関心を持ち、欧米以外の諸社会を「遅れたもの」と見なすエスノセントリズム（自民族中心主義）に陥っておりました。

20世紀後半は、地球の至るところで、このような傾向の軌道修正が行われつつある時代だと言えましょう。

「国際交流」というと、とかく欧米に向きがちなことがいまだに多い日本で、北九州の方がたが、アジアへの注目を市民の活動として推進していらっしやることは、まことに先駆的かつ創造的なことであると尊敬しております。それと同時に、日本に住む、多様な文化的背景を持つ人びとを尊重する姿勢を保持しようとしていらっしやることについても、同様の敬意を表したいと思います。

さて、これまで述べてきましたような、いわゆる「近代化」のプロセスの中で、多くの社会では、「男は外・女は内」という性別役割分業化が定着するに至りました。大雑把に言うとも、それまでは、男女が柔軟に家族の内外的なことに関する情報やノウ・ハウを共有していたのを、「近代化」の進行が、男を稼ぎ手に限定し、女を家族の守り手に限定する、その上で、男を人間的に優れたものとして、女を人間的に劣ったものとするといった偏見を助長してきました。特に男女の識字率の格差が大きい社会では、新しい農業技術や工業技術が導入されますと、その機械や薬品などの取扱い注意書を読みこなす男性が生産現場の中心となり、女性たちは、生産現場からはみ出してしまったり、せいぜい外まわりの掃除やごみ捨ての用事を分担するしかなくなるといったことが起ったりもしています。このような現実に関しても、「社会的公正とは何か」という視点から、近代の軌道修正が行われつつあります。

情報収集力、表現力、人間関係調整能力、国際性などにおいて、大変すぐれた能力を持っている女性は多くいます。

地球上の多様な文化を持つ人びとが相互に学び合う時代が到来しております。

設立1周年記念

座談会

アジア女性交流・研究フォーラムは、10月に設立1周年を迎えました。フォーラムでは、これを記念して、各界で活躍中の皆さんを招き、フォーラムが設立準備段階から取り組みを行っている「開発と女性=WID (Women in Development)」をテーマに座談会を行いました。(編集=事務局)



出席者 堀内 光子 (内閣総理大臣官房参事官) 末吉 興一 (北九州市長)
目黒 依子 (上智大学教授) 高橋 久子 (アジア女性交流・研究フォーラム理事長)
高島 肇久 (NHK報道局長) =司会

フォーラム設立の経緯

高橋 アジア女性交流・研究フォーラムは、「まなびあう」「ふれあう」「たすけあう」を活動のテーマとし、女性の地位向上、ひいては世界の平和に寄与することを目指しています。事業には二つの大きな柱がありまして、一つは交流。これは、国際交流や研修・セミナーなどです。もう一つは、お互いによく知り合うことが必要だということで、調査・研究や情報の収集・発信です。殊に、「開発と女性」に焦点を当てています。

今日は皆さんから、フォーラムが今後、どのような取り組みをしていけばよいか、ご示唆をいただけたらありがたいと考えております。

まず最初に、このフォーラムはふるさと創生事業でスタートしたわけですが、アジアに目を向けて、アジアの女性の地位向上に取り組んでいこうと考えられた経緯を、北九州市長からお話しいただきたいと思います。

末吉 北九州市は、五市合併の歴史の上に立っている都市なんですね。皆さん、このマイナスの面を言うけれども、ぼ

くはプラスの面も多いと思います。その一つが、五市が競争的であるということです。北九州には女性グループがたくさんありますが、その人たちが、非常に競争的であるし補完的でもあるし、また全市的でもある、という素地が一つあります。それからもう一つは、ふるさと創生事業の1億円を、何か、将来につなげることに使いたいと思ったんですね。そのために、アジアに向けた女性問題についての窓口を開きたいということになりました。なぜアジアなのか、これは地理的なこともらんでアジアということに決めました。なぜ女性問題なのかといいますと、女性問題は単に女性だけの問題ではない、社会全体の共通の問題であると考えたからです。21世紀の社会の安定と発展のためには、個人の能力が十分に発揮され、主体性が尊重される社会でなくてはならない、そういう観点から女性問題をとらえる必要があるわけです。

最終案は三つに絞られていたのですが、他の二つのプロジェクトを押しつけてフォーラム設立が決まりました。女性の皆さんのパワーが強かったということもあり、あれよあれよという間に、ダークホースが当選したというわけです(笑)。

いちばん苦労したのが名称であります。名称は同時に何をやるかということですから、「アジア女性交流・研究フォーラム」は、交流

と研究の間に中ぼつをつけてありますが、実はこれは非常に意味を持って私どももつけたところです。交流を行うと同時に研究をする、交流と研究を相互に関係づけるという気持ちが込められています。交流と研究を、いろいろな国やセクションに焦点を当てながら展開していくわけです。

高橋 北九州でスタートした事業でありますけれども、北九州だけではなくて中央のいろんな分野の方に相談したり、参画を求めたりということで、実は今日ご出席の堀内さんには、最初の基本構想の段階からかかわっていただいています。堀内さん、いかがですか。



▲高橋久子氏

堀内 こういう問題を地方公共団体がお取り上げになるのは、非常にメリットがあると思うんですね。国のレベルでやりますと、どうしても縦割りになっていて、各セクションを統合するのがなかなかできない。その点、地方公共団体は大変小回りがよくいいですか、いろんな分野をうまく総合して、一つの目標に向けてエネルギーを集中できるという意味では大変にやりやすい。開発と女性という問題はさまざまな分野の問題を含んでいるんですね。地方公共団体は横断的な取り組みがしやすいことが、一つのメリットだと思います。それから、もう一つは、地域住民の方が一緒になって活動ができるということです。特に、交流という分野では、地域の人びとがいかに参加するかということが重要です。地方公共団体がおやりになるメリットは、直接住んでいる人とコンタクトをとれることや、市民と一緒に参加できることだと思っています。

高橋 高島さん、報道というお立場で、いろんな情報のまっただ中におられるわけですが、フォーラムについてどのように思われますか。

高島 実は、情報がいろいろ集まってくるはずの私の場所なんですけど、北九州でこういうことが行われていることは全く知りませんでした(笑)。最初にお話をお伺いしたとき、どうしても鉄のイメージが強くて、女性がまず結びつかず、さらにそこで行われていることが、アジアとの交流、研究、中でも女性と開発の問題という、極めて水と油どころか(笑)、とうてい近寄るはずのないものが、結びついて、実際に活動が行われているという、しかもそこに至るまでの経緯の中で、ふるさと創生事業というものが入ってくると、これは一体どういうものなんだろうかと大変に戸惑っていたわけです。ずっと話を伺っていて強く思いましたのは、北九州という場所柄、自然にアジアに目を向けていたという、自然発生的な発想というものを、私は高く評価したいと思うんです。

それともう一つ、女性団体の活動が大変に盛んであったというこ

と。むしろ工業都市であったがゆえに女性がものを考える時間が多かったのではないのでしょうか。鉄というのが役立っているのかなと、興味深く今までのお話を伺ってきました。

高橋 もう私どもは北九州の女性たちの熱意に支えられてやっているような具合いなんです。

開発の目的

高橋 早速、開発と女性の問題に入りたいと思いますが、「開発」ということば自身が、国際婦人年のテーマでも「平等・発展・平和」というふうな、Developmentを「開発」と訳さないで、「発展」と訳したんですね。当時は、日本の非常な経済成長の末にいろんなひずみが出ていた時代で、どうも開発ということに抵抗感があったと聞いておりますけれども、JICAの報告書をまとめられた目黒さん、「開発」をどのように考えればよいか、お聞かせください。

目黒 最近、「発展」とか、「開発」という概念のとらえ方が、かなり変わってきているようです。特に「開発」ということばが非常にアグレッシブで人為的なニュアンスが強いということで、日本語になおす時、否定的に考えられてきたんですが、最近では積極的に「開発」ということばを使うようです。私は、「開発」というのは要するに「変化」だと思うんです。そして、変化の中身をどのように把握するかが問題だと思うんです。社会の変化が個人の生活とどう関連するか、社会の変化が個人にどういうインパクトを与えるかということに関心が深まってきたというのが、最近の特徴ではないかと思います。

変化全体を見ると、私は、三つの特徴があると思います。まず第1点は、最近の社会レベルでの変化の規模というのは、グローバルに全部つながっているということなんですね。世界規模の変化が生じてきている中で日本であり、各途上国の状況であるというふうにつながっているところが、最近の変化の最大の特徴だと思うんです。経済、政治、さまざまな社会制度、人口など、世界的な規模での変化が個人個人にインパクトを与える、そういう状況認識が1点です。

それから2点目は、多様性ということ。アジアを見ても、一つ一つの国の状況が大変に違うので、その変化のあり方も多様とまではずす。それと同時に一つの国の中でも多様性が著しく、女性といっても一律ではないわけです。社会の中で上層部もあれば最貧層もあるし、農村部、都市部もあって、ものすごく多様だと思うんです。これは、とても重要な点なんですね。



▲目黒依子氏

それから3点目は、今の二つの状況を踏まえた上で、では、変化を促す目的はなんだろうかと、開発の目的を確認する必要があるということです。結局これは、先進国のための開発ではなくて、途上国が自力で歩む力をつけるための支援だということ、支援というのはさまざまな活性化剤であると、このようにとらえられるのではないかなと思います。

高橋 開発という概念がだいぶ変わってきているということなんですけれども、堀内さんは、国連時代に、「ナイロビ将来戦略」をまとめられましたね。あの将来戦略は開発がずいぶん大きなウェイトを占めていましたが、堀内さん、いかがですか。

堀内 経済、社会、文化など社会の中のあらゆる発展というものを開発ということばで言い表しているのですね。国連開発の十年は'60年代から始まりました。国連婦人の十年中間年の'80年はちょうど第3次開発の十年が始まる直前だったんですね。開発の十年のために国連は開発戦略を作るのですが、その中で女性の問題をもっと取り上げるべきだと、この時すでにいろいろな議論があり、提案がありました。それを受けて5年後のナイロビ将来戦略では、国の開発への女性の完全参加とその成果の享受が引き続き強調されたんです。

結局、社会のあらゆる変化の究極の目的は、人びとの幸せだと思うんです。したがって人びとの幸せを追求する場合に、女性が本当にさまざまな過程の中に入っているのか、決定に参加しているのだろうかということが一つの大きな問題なんです。

社会の発展の中に女性が組み入れられて、その意見が、本当に社会の中に取り入れられているのか、そして社会が実際に成果を得たときに、本当に女性も成果を得ているか、ということがもう一つの大きな課題だと思います。

開発とは？

高橋 開発というのは、全世界的に大きな問題になっているわけなんですけれども、開発というのが果たして、本当に最終的に人間の幸せにつながっていくような開発になっているのかという点ですね。高島さん、いかがでしょうか。

高島 実は私、ちょうど20年前の'71年に、開発をテーマにした番組を作りました。世界中、あちらこちらに旅をして、1時間の番組を作ったんですけれども、その番組のタイトルを何にしようかと迷ったんですね。で、「Development Aid」、というのはいろんな点でよい、というのは頭の中にあっただけなんですけれども、「開発援助」としたところでお客さんがつくわけではない。番組のタイトルっていうのは、まさに我われが番組で何を言おうとしているのが集約されたものであると、いろいろ迷いまして、最後に「豊かさへの道」というタイトルになりました。これは、当時NHKがずいぶん力を入れていた番組だったので、番組諮問委員会で意見



を伺うことになっていました。そこに「豊かさへの道」という題を示したところ、「高島くん、あなたは豊かさというのをどのように考えているのですか」という大変鋭い質問を受けました。

日本は当時、所得倍増計画によって、お金を蓄えていました。日本の目指していたのは、欧米の物質的な豊かさだったんですね。実は、番組のスタートになる部分ですが、ニューギニアの高地に住んでいた人々を平地に連れてきて、油椰子を育てさせることによって彼らに現金を与え、さまざまなものが買えるようになる、そして、彼らは豊かになるんだというエピソードになっていましたね。全くそういう生活を知らない人々を、貨幣経済に連れていくことが、豊かさへの壮大な実験なんだという番組だったんです。我われは自然に電気冷蔵庫があるのが豊かである、テレビがあるのが豊かであるということ、ごくごく自然に受け入れていて、「豊かさへの道」というのを番組のタイトルとしたわけなんですけれども、それでは一体、「豊かさ」とはなんだろうという質問に対して、私は答えに困ったんですね。今、堀内さんから幸福を追求するというのが、開発の目的なんだというお話がありましたが、多分、「幸福への道」とした方がよかったのではないだろうか(笑) 20年たった今、反省しているのですが、その時に、豊かさとは果たして何なんだろう、開発援助とは何だろうと自分なりに考えてみたものです。

時代が進んでいくにしたがって「開発」の意味づけが変わってきている中で、変化を見通しながら、その意味づけと戦略を考えていくことは、大変に難しい問題をはらんでいると思います。21世紀を目前にして、まさに21世紀はどういう世界、地球になるかということを考えて、その時に個人、特に、女性の役割を考えながら、「豊かさへの道」を追求する時代に来ているような気がします。

目黒 今、我われが聞くと、ああ、それはいいタイトルだなと思いますよ。ところが、その当時の基本的な発想が今おっしゃったように、テレビや冷蔵庫を持つということが豊かさだということでしたので、豊かさということばの意味の変化を痛感いたしますね。一体何が幸福なのか、豊かさなのかということ定義するのは難しいわけですね。私は、「生活の質の向上のため」という表現を使うんですけれども、これもまた定義が難しい。けれども、私が第1の点として申し上げました、社会全体の変化がグローバルなスケールで見られ、それが、個人個人の生活にもものすごいインパクトを直接的に与えるようになったということが、やはり、幸福とか、

豊かさとか、生活の質ということ、個人個人の立場から考えねばならなかったということだと思えます。

末吉 WIDをみんなの共通の認識にすることからスタートしなければいけないという気がしますね。

堀内 たしかに概念自体がわかりにくいですね、ですから、政府が、「西暦2000年に向けての新国内行動計画」を5月に改定したときも、「開発と女性」の後に、括弧書きで、Women in Development—あらゆる開発の過程において女性の果たす役割の重要性を認識し、女性の受益と参加を確保すること—と説明しています。

目黒 今まで、開発と言うと一般的に経済的な開発を意味していた。それが、いろいろな意味での開発、よりよい状況づくりを考える「社会開発」を重視するようになりました。日本は経済的には先進国ですが、社会開発を考えますと、いろんな意味でまだ途上国と言えますよね。

開発と平等

堀内 開発というのは、女性の地位向上のための一目標ですから、先進国であろうと、途上国であろうと、どこの国でも女性の地位向上には開発の問題が深くかかっていると思うんです。ただ、先進国は「平等」でかなりカバーできることも確かです。先進国では、あらゆる分野で平等に参画するということが女性の地位向上ということで、開発と女性へのアプローチは、国際協力の中で、開発と女性をどうとらえるかということが重要だと、私思います。

目黒 最近まで、日本の女性にとって最大の関心は平等であったことは間違いないですね。

堀内 総理大臣の私的諮問機関である婦人問題企画推進有識者会議から、4月10日に総理あてに、ご意見をいただいたのですが、その中で、日本は今まで平等問題に力点を置いてきたけれども、開発への取り組みは世界の中でも遅れているとのご指摘を受けました。それに沿って、政府が一次改定を行いまして、平等だけでなく、開発も強調するという展開になっているのです。

高島 世界の歴史を引っ繰り返してみれば、全ての国で言えることではないかと思えますね。婦人の参政権から始めて、同一賃金、同一雇用条件……。平等が重要なファクターとして浮かび上がってくるのが、それぞれの国の発展の一段階を示すだろ



▲高島肇久氏

うという気がするんです。

たとえば、インドの結婚における女性の地位の問題が、今、すごく欧米で取り上げられていますね。結婚における女性の地位の問題、結婚生活、女性の就労の機会、家事労働の評価、そういう社会における女性の地位というものが、その国の発展段階をはかる一つのバロメーターになる。そして平等の問題を追求しつつ、自分たちの問題を見るのと同じ視点でその他の国ぐにを見る、それが開発に結びつくというような気がします。

高橋 そうですね。ちょうど'70年代頃から、結婚退職制、若年定年制が裁判で争われて、次つぎに企業側が負けていきましたが、それは、国際婦人年という対外的な要因がなくても、日本で平等問題が、内部的な事情として出てきた時期だったと思うんです。平等問題が重視されるというのは、日本社会において必然であったと思うんです。

私は、開発問題は平等問題と表裏一体ではないかと思うんです。開発抜きには女性の地位向上は不可能であり、女性の地位向上なしには開発それ自体の達成も困難である、と言われてますね。ですから女性の地位向上は、女性が平等に、その開発計画に参画していくことだと思います。単に受益者というだけではなく、参画して、発言して、どういう開発計画をたてるかということをやっていくためには、平等問題と開発問題は、切り離せない問題ではないかと私はとらえているんです。

目黒 まさにおっしゃるとおりなんです。今まで、平等は平等、開発は開発、と別個のとらえ方をしていました。今、それらは同じ問題なんだという認識が深まってきたことによって、経済的には途上国であっても、そうでなくても、共通問題として一緒に考えていこうとする気運が高まってきました。その点、日本は気運の高まりが遅かったのです。

国全体のパイを大きくすることがかつての発展だったわけですが、それに対する見直しが'70年代に行われたにもかかわらず、開発についての発想は、ジェンダー・ブラインドであったということですね。受益者が特定のセクターに偏らないようにという認識が出てきたにもかかわらず、相変わらず女性は、別枠の中に置かれていたことが、ナイロビ将来戦略の中で指摘され、WIDが表面化したように思えます。ですから、これまでのあり方を反省して、ある特定のセクターの受益のために、他のどのセクターも犠牲にならないような開発モデルを考えようということです。今まで犠牲になってきたセクターの中心部に女性がいたということですね。

高島 今、世界は大きな問題を抱えています。西暦2050年には世界の人口が100億を越えるという問題と、地球の温暖化の問題です。つまり、地球はそれだけの人間を支えていくだけの力がなくなるのではないかと警告です。今まで生きてきた人類が将来の人類につけを回していく、大きな課題だと思います。これは、従来の方法では解決できないテーマだと思うんです。人口問題＝家族計画は、やはり女性が主導権を握らなければ、もしくは女性が



発言権をもたなければ、絶対に解決できないことですね。今までは、家族計画の進め方を女性を中心に、地域のグループを作って一生懸命に教え込んでいたのですが、うまくいかなかった。なぜかという、いくら教えても、亭主がノーと言うと、せつかくの教育の効果がでないのです。今、日本は合計特殊出生率が1.53という、むしろ人口減少というところまできているのですが、我われの経験、特に日本の女性が経てきた、さまざまなプラスとマイナスの両方の経験を広めていくことが非常に重要なのではないだろうかと思うのです。知識の共有といいますか、日本の中ではどのような経験をしてきたか、それが人口増加を抑制する方向にどのように働いてきたのかということ、これから発信していくことが極めて重要なことだと思います。

高橋 途上国においては、人口増加が爆発的に起っている。女性の地位が高くならなければ、これは解決していかないと。ところが、日本では、合計特殊出生率が非常に低下し、女性の社会に対する反乱だと言われている。つまり、女性が産みやすい状況がなければ、子どもを産みながら、なおかつ自己実現ができるという社会にならなくては、子どもは産まないですね。女性の自己実現ができる国では、出生率は上がってきています。人口は減らすほうも、増やすほうもやっぱり女性の地位が高くならなければいけないんですね。

効率と公正

堀内 要するに、一人一人の可能性を尊重し、みんなが参加する社会を指向することが大事なんですね。

国連の中で「開発と女性」の問題を考えると、問題の集約は、「公正」と「効率」、この2点なんです。「公正」というのは、全ての人々が平等に参加、受益するということですね。公正の追求というのが一つの問題で、社会の構成員の半分以上を占めている女性が疎外されていることが大きな問題です。また、「効率」をとっても、人口の半分以上の女性を疎外するという事は、社会のあらゆる仕組みが有効に機能しないと言えますね。

目黒 国連で、「公正」と「効率」が、キーワードになっているという話ですが、まさにそうだと私自身も感じていました。今までは効率ということばが前面に出ていて、社会全体が経済的な豊かさを求めてきましたね。効率中心主義です。効率主義の結果がもたらした問題を考える際のキーワードが「公正」だと思いま

す。生活の質の向上を求める過程のあらゆる段階に参加することについてのフェアネス、公正の問題ですね。公正という概念もこれもあまり日本では馴染みがないものなんですよ。最近、日本でもあまり馴染みのない概念が、世界中で共通の課題になっているという感じがしますね。

堀内 おっしゃるとおりですね。フェアネス、ということばは、たしかに平等ということなんですから、真っ正面からは考えていなかったという感じがしますね。

高橋 社会的になかなか声が反映しにくい層の声を、開発の中に反映していこうというわけですね。

堀内 加えて、そこまでいったもう一つの背景は、女性は、目に見えなかったけれども、社会発展に大きく貢献していることだと思うんです。そこをきちんと認識することが極めて大切だと思います。たとえば、農業社会でも、女性は重要な働きをしている、それから人口問題でも、家族の再生産という点でも、女性は非常に大きな力を持っている。にもかかわらず、全く目に見えないというのか、認識されなかった。そこをきちっと認識するというのが大切だと思いますね。



▲堀内光子氏

高橋 国連で、女性は総労働時間の3分の2働いて、収入は10分の1で、資産は100分の1ということをやられておりませんね。

末吉 何でそうなっちゃったんでしょうね。太古の社会というのは、女性が大切にされたんでしょう。

堀内 社会システムががちと決まったときに、組み込まれなかったんですね。

目黒 経済発展を目標に、生産効率に適したシステムづくりを始めてからこうなったというのが一般的な了解ですね。だから、「家父長制」ということばがよく使われるわけですね。フェミニストの間では、女性問題について「家父長制」ということばは、男性による女性支配を指してますね。この家父長制というものの存在が途上国においても見られるわけですね。だから、女性たちをいかに教育し、生産の場に参加させる仕組みを作っても、家父長制がある限りは、男性の意志のままになる、この基本的な仕組みは変わらないということで、国際社会で問題になっているところですね。

堀内 そうなんです。効率という問題を追求すると、ヒエラルキーができてきて、集団の中でどうしても疎外されていく人間が出てくるんですね。

目黒 そうですね。今、地球レベルで、今までのようなやり方では地球の将来がないという認識が出てきた時点で、それでは、女性も一緒に考えていきたいと思いますという方向に、どこまでいけるかという時点ですよ。

女性が開発に参画するために

高橋 それでは、女性が開発に参画していくには一体何が必要なのかということになってくると、いかがでしょう。

高島 やはり、教育、情報というのが必要だと思うんですね。日本も欧米も女性の地位向上の背景には、教育水準の向上と情報伝達の整備があると思うんです。開発途上国に対する先進国としての役割の一つは、教育をもっと推進し、識字率を高め、識字率をベースにして、情報をキャッチし、解釈し、生かしていくという素地を女性に与えることではないでしょうか。

もう一つ、先進国も、開発途上国で何が行われているかを知ることが重要だと思いますね。たとえば、ネパールではヒマラヤの山肌に、畑をどんどん作っていくわけですね。その結果、降った雨がとどまるところがなく、下流のバングラデシュで大洪水が引き起こされたのです。また、ネパールの人たち自身、火葬にするための薪も手に入らない。普段煮炊きに使う薪は、はるか山の彼方まで取りに行く。

これは、我われが今までずっと行ってきた開発というのが、目先のことばかりを追いかけることによって、結果として、とんでもないことを引き起こしていることの一例ではないかと思うんです。でも、これは、どの国でも、生産効率を上げながら同じようにやっていることなのです。まさに、豊かさにつながっていく一つの大きな過程であって、これを方向転換するために、すでにその過程をってしまった我われが、何か言おうとするのは大変傲慢なことで、決して許されることではないと思うんですね。僕らの課題は、開発途上国の現状を実感し、自分たちの問題としてとらえることだと思います。という意味で、知ることは教育と情報は、途上国の人びとだけでなく、先進国の人たちにとっても、重要なことだと思います。日本では1億をこえる優秀な頭脳があるわけですから、誰かいいアイデアを持っている人がいるかもしれない。そのためにも情報を提供し、日本国内に教育を広めていく。それをまた、世界へ広げていく必要があるのではないかと、という感じがしてならないですね。

末吉 全くそう思います。情報提供というのは、間接的ですけども意義のあることですね。いつもふれあっていると何か共通のものを感じ合えるんですよ。

堀内 教育というのは、私も大変重要だと思いますね。それと、もう一つつけ加えたいのが、システムづくりなんです。Issue=問題を取り上げるときに、やっぱり取り組みへのシステムづくりが必要だと思うんですね。私たちはIssueという時に、局面



の把握だけになってしまいがちなんですが、実は、その問題にうまく取り組むためのシステムづくりが非常に重要だと思うんですね。どうやってシステムを作って、女性たちのIssueを施策としてもきちっと取り上げ、浸透できるようにするか、そこが今後、極めて大切なことだと思いますね。施策のメインストリームに上がるためには、そのメインストリームに上げるだけのシステムを作らなくてはならないんですよ。

目黒 システムづくりは重要ですね。今、途上国の問題は貧困問題に代表されるぐらいですが、特に女性の貧困が進んでいるということが、共通認識なんですね。いろんな原因はあるようですが、国の開発を効率的に進めるための多国籍企業による経済活動が女性労働者の貧困化を招いているという指摘があり、特にアジアで顕著に見られるようです。貧困は人や健康、環境とも絡んでくる問題です。女性が貧困からいかに脱却するか、貧困状況にある人たちがいかにレベルアップするかというプログラムを、それぞれ1億の頭で考えたら、いろんなアイデアが出るんじゃないかと思えます。アジアの女性たちの貧困の特性や原因を研究して、その状況から脱却する方策を考えるという、WIDの視点に立つ研究は欠かせないと思えます。

高橋 フォーラムも、アジアの国ぐにのことを知る、自分たちのことを知ってもらうということを、第1の課題にしたいと思えます。

フォーラムに望むこと

高橋 では最後に、女性と開発、女性の地位向上の問題において、日本はどのような役割を果たしていけるのか、その中で、アジア女性交流・研究フォーラムはどういう役割を果たしていったらよいのかということについて、皆様一言ずつお願いします。

高島 例の湾岸戦争の中で、国際貢献という問題が日本国内で叫ばれましたが、国際社会において日本はどのような地位を占めているのかが、我われ自身の大きな課題として、今、問いかけてられているんだと思えます。世界に目を向けることに気がついた

時代だと思うんです。その中で、北九州が、アジアとのつながりを地域のレベルで考えていく、また、地域の女性たちを巻き込んだ格好で、アジアとの関係を深めていこうという出発点は、実におもしろいし、むしろ、中央でなく、政府でないというところが、相手にも受け入れられやすい素地を作ったんでしょう。さらに、小回りがきく、自分たちのサイズで、あまり無理をしないで活動をやっていける、すごくいい場ができているんだなということを改めて痛感いたしました。

特に交流という部分は、アジアの中に、アジアの社会に、アジアの土地に、北九州の女性たちが積極的に飛び込んでいって、自分たちの生の体験として、まさにふれあうことによって事情を知り、その中で、自分に何ができるだろうかということを考えて、行動する。それから、もう少し進めていって、地球社会の中で北九州に住む女性たちはどういう役割を果たすことを求められているのかを考える機会をお持ちになるように期待したいですね。その可能性がとてもある場所だなあと拝察いたしました。

目黒 ふるさと創生のお金で、こういうものを創ったというのは、本当に嬉しいですね。もしかしたら、最も有効な1億円の使い方じゃないかと思うぐらいです(笑)。フォーラムは、北九州市の組織ではありますけれども、市民の方たちが一緒になって作っていく場だという考え方に立って、北九州市の予算的なバックを生かして、NGO的な活動をするということ、私はとても期待したいですね。

そして、日本とアジア諸国との今までのつながりを認識した上で、それぞれの理念と共通の理念を尊重しながら発展的な視点を持って、交流を深めていってほしいと思います。

それから、交流の対象になる人たちですが、どういう団体の人たちが相手の国にいるかを見つけ出すのは大変なんですよ。それで、手っ取り早く、大きな組織とか、政府に頼んで見つけてもらうとかが多いのですが、そうすると、グラスルーツの人たちが出てこない。ですから、相手の団体とか、組織とか、そういったものをあまり限定しないで、柔軟に相手を見つけていってほしいと思うんです。最初は失敗しても、その中の1割、2割がいいのであればそれでいいというような気持ちで、交流の対象を広げてもらいたいと思います。制約をあまりつけないで、女性フォーラムの斬新なアイデアを生かしていってほしいと思います。

堀内 私はフォーラムに三つのことを期待したいと思います。一つは、アジアの女性の研究です。アジア研究というはありますが、アジアの女性を対象とした研究はあまりありません。国という組織ではない、いろんな人を包含した組織で、地道な研究をやって、その成果を日本の皆さんに出していただきたいというのが、私の大いに期待するところです。

それから、二つ目は、是非アジアの女性たちの自立ということに焦点を当てて、今後の活動を続けていただきたいということです。やっぱり究極は、女性の自立だと思いますね。いろいろなプロジェ

クトをお考えになるときに、女性自身が最終的に自立できるようなプロジェクトを考えていくことが必要だと思うんですね。現代社会というのは、たくさんの要因があって、それらが重なり合っていて、解きほぐすには極めて難しいと思うんですが、小さな努力を続けていくことが必要だと思います。フォーラムは、本当に新しい第一歩ですので、試行錯誤はいろいろあると思うんですけども、是非女性の自立に焦点を当てて、何か実践的なプロジェクトを考えられたらいいなと思います。

それから、3点目は、地域の人に参加するということ。これは本当に国の施策ではだめなんです。北九州の方一人一人が、いろいろなことを知ったり、実際に体験することから始まるんですね。ですから今後、市民参加型でやっていってもらいたいと、大いに期待しております。



▲末吉興一氏

末吉 ありがとうございます。フォーラムは交流と研究という二つの柱を持っていますが、交流部分については、これは相当自信を持っています。女性は垣根がないというのが一つの要因でしようが、よい地域リーダーがられる。だから高島さんが、あの北九州でと言われると、私も

自分で市長をやっていて本当に女性のパワーの力強さに驚きますね(笑)。しかも、北九州の特徴は、男性も参加していることです。ただこれからは、もう少し若い人たちが出てくるような仕組みを考えなければいけないと思いますね。あとは研究。どういうふうに行っていくかという、これは北九州だけでは荷が重いから、いろいろな方がたに、課題や取り組み方などをご助言いただきたいと思っております。ずっと将来模索していきたく思いますので、よろしくお願いします。いずれにせよ、未知の経験で、私どもも独自性で一生懸命やってきたのですが、やってくる当事者というのは、非常に孤独で、寂しいんですよ。時どき勇気づけてくださると、もう、後には引けなくなるんじゃないかと思えます(笑)。

高橋 市長も言われましたが、私も理事長になりまして、フォーラムを運営していくに当たっては、大変に孤独でして、本当にこんなことをやっていると疑問を持ち、かつ、問題の大きさに呆然とすることがあります。しかしながら、今日お話を伺いまして、私どもは私どもなりに、しっかりと腰を据えて、アジアや女性の現状を見据えながら、いろいろな問題に取り組んでいくことが大切で、努力の積み重ねが大きな力になっていくのだと痛感いたしました。一つまた元気を出して、このフォーラムが、少しでも、開発と女性問題の進歩に役立つよう努力を続けていきたいと思えます。皆様も、フォーラムの活動をどうぞご承知おさくさいまして、これからもご協力くださいますようお願いいたします。本日はどうもありがとうございました。



▲アラザール校

人がとても暖かくてやさしい国でした。家の屋根の色のせい、「赤い」というイメージを持ちました。

アラザール校

インドネシアの基本的な学校体系は、6・3・3制で、小学校の6年間で義務教育となっています。アラザール校は、インドネシアの恵まれた家庭の子供たちが通うイスラム系の私立学校で、幼稚園から高校までの一貫教育を行っています。学校では、中学校・高校の生徒とディスカッションし、どんな学生生活を送っているか、将来どんな分野で仕事をしたいかなどについて話し合いました。

みんな上手に英語を話せるので感心しました。もっと英語の勉強を行けばよかった。お互いに分かり合うためには、やっぱり「ことば」が大切だなと思いました。



インドネシアには、アラザール校の生徒たちのように恵まれた子供もいれば、そうでない子供もいます。ジャカルタ郊外のボゴール植物園を訪れたとき、小さな女の子が食べ物をおねだりに寄ってきました。団員の一人がお菓子を渡したとき、現地のガイドさんから叱られました。

「何かをしてもらったお礼としてものを渡すのはよいことです。でも、貧しいからといって、もの乞いをすれば何かもらえると習慣づけるのは悪いことです」と。



▲ろうけつ染め工場



▲オイスカ研修センター

オイスカ研修センター

オイスカ(OISCA=Organization Industrial Spiritual Cultural Advancement)は、アジア太平洋地域の国々への自助努力による開発推進を支援するための研修を行っています。ボゴールにあるオイスカ研修センターでは、農業の技術研修を行っています。農園では、すいか、えんどう、なす、とうもろこしなどが栽培されており、団員たちは、現地研修生とともにすいかの枝芽摘みや、えんどう畑のうねづくりをしました。当日は、愛知県三好町の高校生や大学生も研修に訪れており、夕方、オイスカの指導員や現地研修生から交流会に招かれました。交流会では、やぎの丸焼きやインドネシア料理に舌つづみを打ち、キャンプファイヤーを囲んで炭坑節などの盆踊りを踊りました。



▲オイスカ研修センター キャンプファイヤー



違う人種、違うことばを話す人たちが一緒に汗を流すという素直らしさに感動しました。みんな明るくてバワフルで、キャンプファイヤーのときに組んだ腕の強さが忘れられません。

今度の旅行を通して、インドネシアの人は一生懸命毎日を生きているなあと感じました。日本人の生き方が甘いのではないかともしました。「生きる」ことを学んだような気がします。一つ何かつかんでこようと思いましたが、両手に抱えきれないくらいものを持って帰りました。ホントにみんな最高でした。

メンバー代表 深海 明 (小倉高3年)

一つ何かをつかんでこようと思ったけれど、実際には両手に抱えきれないくらいものを持って帰りました。

日本ユニセフ協会北九州支部は、創立20周年を記念して、中学・高校生の東南アジアスタディツアーを実施しました。同支部は、日本国内でユニセフの活動を支援する全国組織として設立された(財)日本ユニセフ協会の北九州支部で、開発途上の児童の保護・支援を目指すユニセフ思想を普及させるためのキャンペーンや、募金活動などを行っています。

一行は、公募で選ばれた中学生6人、高校生10人とユニセフ協会スタッフで、8月22日(木)～8月28日(水)、インドネシア、シンガポール、マレーシアを訪問し、ユニセフをはじめ国際協力活動の現状や、各国の歴史や文化、生活様式をつぶさに学びました。

ここでは、インドネシアでの体験を紹介します。

インドネシアは、赤道をはさんで13000余りの島を有する群島国家です。首都ジャカルタは、人口約900万人。今年は、インドネシアの観光年で、世界中からの観光客誘致に国をあげて取り組んでいます。



▲ジャカルタ市内

ユニセフ協会北九州支部 設立20周年記念事業 「東南アジア訪問記」



ユニセフ・インドネシア事務所

インドネシアの貧しい地域では、乳児や幼児の死亡率が高く、死亡原因の多くは、下痢による脱水症です。ユニセフでは、経口補水療法や産児制限思想の普及を行っています。



▲ユニセフ・インドネシア事務所

アジア太平洋開発センター(APDC)



APDC
開発と女性プログラムコーディネーター
Ms. Noleen Heyzer

アジア太平洋開発センター (APDC=Asian and Pacific Development Centre)は、アジア太平洋地域の開発を取り扱う中核となるセンターで、日本を含む20か国で構成される政府間組織であり、その活動の中でWID (開発と女性) プログラムを実施しています。APDCは、実施する事業にWIDの視点を取り入れているのが特徴です。

APDCは、この地域の国々が直面している開発の問題に回答を与えることを目的としています。実際には、開発がいかにあるべきかという研究や分析を行ったり、適切な開発戦略や方針、プログラムを作成したりして、各国の政策に反映されるようにしています。開発と女性プログラムは、今後作られる政策や行動計画において、女性を開発計画の周辺的な存在にとどまらせるのではなく、開発の受益者であり担い手として、開発のプロセスに女性が組み込まなければならないという緊急の課題に応えるものです。

そのため、APDCは、開発プロセスが女性 — 特に貧しく、公民権のない女性 — に与える影響を調査する研究プロジェクトを推進しています。研究は、APDCが取り上げる開発問題のほか、地域の女性団体のニーズに基づいた研究も多く行っています。

開発と女性プログラムは、地域の女性の活動に根ざしたものでなければなりません。なぜなら、女性の地位の向上は、小さな問題の解決が第一歩であり、その積み重ねによって初めて、開発というマクロなレベルにおいても達成されるようになるのです。私たちは、研究によって得られた成果が政策に反映されるよう、草の根での女性の地位向上に基礎を置いた研究をしたいと思っています。

私たちの行う研究プロジェクトは、その成果が政策の企画立案者や開発担当者が必要とする情報であるとともに、研究成果をまとめた出版物は、女性問題に関心がある多くの草の根の団体にとって役に立つものとなっています。



▲開発と女性プログラムチームのメンバー

開発と女性プログラム推進において、研究以外に、次の三つの重要な事業があります。

- 1 効果的なプログラムを計画・実施するために、女性リーダーや労働者の研修を行うこと
- 2 研究を通じて得た情報を広く公開すること
- 3 女性たちの活動全体を絶えず把握しておくために、地域の女性団体とのネットワークを形成すること

具体的な活動は次のとおりです。

1) マクロレベルの研究プロジェクト

環境や貧困、人口、食糧不足、エネルギー、都市化といったマクロの問題の中に位置する女性の姿を浮き彫りにし、女性の能力や貢献力を生かした解決の道を研究しています。

問題を解決していくうえで、行政機関とNGOの連携も行っています。

2) 研修

開発計画の企画、実施、評価の各段階において、女性が主体的に参画していくための研修を行っています。軽視されがちであった女性のニーズを明らかにし、女性の視点を生かした研修のあり方を検討し、住民に対する研修のほか、政策決定者、実務者に対しても研修を実施しています。

3) 情報の収集発信

アジア太平洋地域の女性に関する情報の収集・分析・発信を行っています。資料や報告集を作成するほか「女性と開発」というニュースレターを発行し、女性のニーズや関心、状況について考える場を提供しています。また、人や組織の情報をデータベース化しています。

4) ネットワークの形成

女性がさまざまな情報やサービスをより多く享受でき、女性自身の社会的発言力を高める支援を行うために、研究機関・女性団体・NGO等とのネットワークを形成しています。

またAPDCでは、マスコミ関係の専門家を中心に、ユネスコと、アジア太平洋「女性とメディア」情報ネットワークを形成しました。女性や開発に関する情報の収集発信や、メディアによるWIDの普及促進を図ることを、そのねらいとしています。



▲女性と海外流出に関するワークショップ

海外通信員レポート

おばあちゃんの絹織物

加藤 真理子さん (タイ)

私が今いるのはタイ東北部、通称イサーンと呼ばれる地方の大学です。今は大学院で開発社会学を専攻しています。去年は学部地域開発学科で聴講生をしていました。教科によっては村へ行って村人にインタビューをしてレポートを書かされるというもので、ほとんど教室に行くことがなく、村にばかり行っていました。

村でまず最初に親しくなるのが、おばあちゃんたち。若い人はバンコクや大都会に出稼ぎに行く人が多く、村に、常時いないのですが、おばあちゃんたちはいつも村にいて農作業をしたり、孫の面倒を見たり、寺に通ったりしていました。農作業は米作しかなく、雨季（5月～9月）には田植えを家族と共に手伝い、収穫の時期（12月～1月）にはみんなと一緒に稲



▲機織りをする女性

刈りをし、農閑期には自分で蚕を飼って絹を織っていました。

絹はここイサーンの女の人にとって大きな意味を持ちます。単に農閑期の副収入になるだけではなく、日常生活の中で伝統的な意味を持ちます。女たちは織った絹の腰巻きを大切に家にしまっておき、娘の結婚式のときそれを娘に贈ります。僧侶用の黄色い布は、息子が出家したときに贈ります。自分が織った布を贈ると、非常に高い徳を積むことになり、死んだ後極楽に行けるからです。寺に行くときや町にお出かけに行くときは、大切にとっておいた絹の腰巻きを着用して出かけます。桑畑の手入れ以外、蚕を飼う過程から最後の織りまで、男の手に触れさせず、母が娘へと伝えていきます。そこには女の意地みたいなものも見え、あの人はいまい織り手だ、この人はまだまだへただとお互いに批評しながら、わいわいがやがや働いています。そのおばあちゃんたちの今まで続いてきた生活サイクルも少しずつ変わろうとしています。

絹は普通しまっておいて、よほどの緊急事態の場合以外は売りません。でも今のイサーンの気候は不規則で水がなく、農業が思ったようにできないため、他の現金収入の道を探さねばならず、絹の機織りがちょうどよい収入増幅の道だということで、政府やNGOにより販売が促進されています。今まで娘のため家族のために織っていた絹が、今は売られ家には絹がなく、日常は工場プリントされた綿の腰巻きを使っています。

絹が経済的な商品価値がなくなったら、これからおばあちゃんたちは誰のために織ったらいいのでしょうか。

所得創出プロジェクト

Elena L. Samonteさん (フィリピン)

アーリング・マリアは4時に起床。ブラカンのサンミゲルの村むらを訪問する長い1日が始まります。

「なぜ、この仕事をするようになったのですか」彼女にたずねると、「人の役に立ちたいからです」という答えが返ってきます。彼女は、ブラカンの村むらの生計改善を推進する女性団体KBBのボランティアの一人なのです。

22歳以上の女性であれば、既婚者でも未婚者でも、この活動に参加することができます。KBBが推進しているプロジェクトは、基本的に生計改善につなげるためのもので、養豚、あひるの飼育、植樹、編み物、裁縫、ぬいぐるみ製作などで、村からの貧困の一掃を目指しています。

養豚プロジェクトに関して言いますと、KBBの支部（これは、47の村に56の支部があるのですが）が、くじで当たった人に1匹の子豚を贈ります。その人は豚を育て、こどもを生ませます。そして、生まれた子豚の中から1匹を支部に返し、もう1匹を村の中の別の女性に贈るという仕組みです。支部に返ってきた子豚は、また別の村に贈られていきます。このようにして利益をみんなで共有するのです。

セーターを編んだり、洋服を縫ったり、ぬいぐるみを作ったりしている人たちは、市場からの請負いでやっており、これらの品物は輸出されます。編み針は地元で竹で作っており、製作段階での出費をおさえています。おもしろいことに、いくつかの村では、女性たちだけでなく、こどもたち、ときには男性もが編み物をやっています。

植樹に関しては、ブラカンでは、地域の生態系維持のために、10年間に1000万本の木を植えることを目標にしています。裏庭に果樹を植えれば果物を食べることができます。また、果物を市場に売りに行くこともできるし、ジャムやお菓子里に加工することもできます。これもまた、所得創出プ

ロジェクトの一環なのです。

自分たちの働いたお金が副収入になるので、低所得層の女性でKBBに加入する人が増えてきています。6～7人の平均的な世帯で、年間、米4～10カバン（1カバン (cavan)=75リットル）相当の収入のある家庭が、この所得増進プロジェクトに参加すれば、その経済状況は著しく改善されます。

このようなプロジェクトは、女性たちの生活にどのような影響を与えているのでしょうか。恥ずかしがり屋で引っこみ思案だった女性たちが外に出るようになり、自信を持つようになりました。夫婦の関係もよくなりました。お互いに協力し、助け合うようになりました。夫たちは、最初のうちは不平を言っていたが、次第に妻の立場を理解するようになり、育児や掃除などを分担しています。

今では、稼ぐ人、家事をする人という固定的な役割分担ではなく、共に参加し分担し合うようになったのです。



▲セーターを編む家族

▲養豚プロジェクト

WORLD BANK クダート女史講演会



世界銀行上級計画担当官

Ms. Ayse Kudat

地球的規模での環境破壊が叫ばれている中で、開発と環境のかかわりが、今、大きく問われています。開発の実施に当たっては、環境保全の考えが不可欠な要素として含まれる必要があるからです。

フォーラムでは、6月15日、世界銀行のアーシャ・クダートさんを招き、「女性と開発を考える」をテーマに講演会を行いました。アーシャ・クダートさんは、国連で「ナイロビ将来戦略」の策定に、世界銀行において「開発と女性」や「環境問題」に携わってきた女性です。現在は、世界銀行の基本的設備・都市計画部で上級計画担当官を務めています。

— 開発と環境、そして女性との関係を考えるときのポイントは。

まず第1に、都市への人口集中があげられます。農村部から都市部への急速な人口流入がさまざまな問題を引き起こしています。

第2に、都市基盤の整備が遅れているという問題です。基本的なインフラ整備が、人口増加率に追いつけないという現状です。

そして最後に、これらの生活環境の悪化の影響が一番受けているのが貧しい女性だということです。これらの女性は生活をその地域の環境に依存しているため、男性よりも被害を受けやすいのです。

— 人口爆発ということばをよく聞きますが。

世界の人口は過去35年間に2倍になり、西暦2000年までには、60億人を越えるという数字が出ています。また、開発途上国においては、都市の人口は今後毎日15万人というスピードで増加し、40年間に3倍以上になると言われています。つまり、人口の増加の方が、都市化のスピードよりもずっと早いわけです。住宅・水道・衛生施設等の整っていない地域に人が増えることによって、さらに生活環境は悪化し、その地域に住む人びとに大変悪い影響を与えています。

— アジアの国ぐにや女性の置かれている現状は。

貧しい人びとの中には埋立地に住む人も少なくなく、さらにそこでのゴミを集めて生計を立てている人もいます。南アジアの国ぐにはゴミの処理に携わる人が多く、ゴミの中に残すものは何もないと言われる程、ゴミ収集・選別・売買という作業を繰り返しています。

また、貧困にあえぐ女性たちは、日常使う水が汚染されている水だと分かっているにもかかわらず、それを使わざるをえない状況に置かれています。女性はインフラが整っていないばかりに、重荷を背負うことになるのです。

工業都市に住む母親たちは、産業廃棄物の名前は知らなくても、有害物質のために流産したり、病気の母親の授乳によって子供たちが病気になるったり、死んでしまったりする事実を身をもって知っています。環境汚染を一番残酷な形で分かっているのは、貧困にあえぐ女性たちであると言えます。

また、都市に住む女性は家事をする以外に、生計を立てていかねばならないという負担があります。生活が女性たちの収入に依存しているのです。貧しい女性は外に出て収入を得る必要がありますが、仕事に就き、なおかつ基本的な市民生活を送ることは非常に難しいのが現実です。たとえば、いつ水が出だすか分からないポンプが勤務中に水を吹き出したとき、女性はそこできれいな水を得るか、その時間働いて収入を得るかという選択にせまられるわけです。

— 私たちにできることは。

開発とは、個人やその社会が継続して向上していくプロセスです。裕福な人が貧しい人びとに金銭的援助をするだけでは、問題は解決しません。社会構造に問題があるわけですから、私たちは、自分自身が問題を理解すると同時に、第三世界の女性たちが問題は何かを見極めるためのお手伝いをしていきたいと思います。

そのためには、

1. 政府が第三世界に援助を行う中で、援助が女性に焦点が当てられたものがあるかどうか確認する。
2. 女性や環境に関する仕事をしている組織と一緒に仕事をする。
3. 国際的なレベルで、効果的にメディアを利用する。
4. 第三世界の女性たちに手を差し延べる。

ことが必要なのではないのでしょうか。

母であり、保護者であり、教育者である女性と一緒に環境保全の努力を続けていくことは、環境について深い認識を持つ若い世代を育てていくことになるでしょう。

※注) 世界銀行

国際復興開発銀行と国際開発協会の二つの機関で構成され、先進諸国から開発途上諸国へ資金を融通することによって途上諸国の生活水準の向上を図ることを目的とする。



第2回 アジアセミナー

フォーラムでは、「第2回アジアセミナー」を8月10日～9月21日の毎週土曜日に、6回にわたって開催しました。

このセミナーは、市民の皆さんにもっとアジアのこと知ってもらおうと、昨年に引き続き開催したもので、97名の皆さんが受講しました。

今回は「開発と女性」をテーマに取り上げ、経済、教育、環境などさまざまな視点から、この問題にアプローチしました。セミナーの内容及び講師の先生方は次のとおりです。

テーマ	講師
女性の経済参加	藤井紀代子 (ILO東京支局長)
女性と教育	中里 彰 (九州国際大学教授)
女性と家族	篠崎 正美 (アジア女性交流・研究フォーラム主席研究員)
女性と環境	長谷 安朗 (九州工業大学講師)
女性と保健	華表 宏有 (産業医科大学教授)
「開発と女性」の今後の課題について	田中由美子 (JICA国際協力専門員)
「開発と女性」についてのNGO及び市民のかかわり	山口みつ子 (市川房枝記念会事務局長)

ここで、「女性の経済参加」についてご講義いただいた藤井紀代子さんのセミナーの一部をご紹介します。



今年6月に、国連の国際経済社会問題局から、178か国を対象とした女性に関する初の地球規模の統計資料「世界の女性－1970～1990」が発表されました。

この報告書によれば、先進国の経済成長は、女性が経済活動に参加する機会をもたらしたものの、女性は男性と同じ仕事をして男性の30%～40%の賃金しか与えられていません。

これは、女性に対する職業の偏りも原因の一つです。女性は精一杯働いているけれども、とすれば低い賃金のところに配置されたり、女性が就いている仕事が低く評価されているためです。

また、アフリカやアジアの女性は、家事労働に1日平均7時間携わっていますが、経済的評価がなされていないことが問題です。報告書では、もし、女性の家事労働が経済的に換算されるなら、多くの国の国内総生産 (GDP=Gross Domestic Product) は25%から30%は拡大するはずであると指摘しています。

フォーラムの窓

女がすなる「アジアの研究」

12月1日～2日に開催予定の第2回「アジア女性会議－北九州」に、アジアの女性についての自由な研究討論の場を設けることにし、発表者を募集した。「専門の研究者でない方もどうぞ」というのが、この募集の特徴である。

十分な応募があるだろうかという心配をよそに、多数の方に申し込んでいただき、今は嬉しい悲鳴である。大学や国際機関の研究者だけでなく、永年地域活動をやった方や、夫の海外赴任に主婦として同行しアジアで生活された方など、経歴はもとより年齢も国籍もさまざまで、12月への期待が大きくふくらむ。

これまで「学問・研究」といえば、家事・育児・病人や老人の介護・地域活動等を女性まかせにして、男性主体で行われてきた。認識の対象も男性中心だったことから来る偏りや歪みの大きさに女性が異議を唱え始めたのは'60年代以降である。これを是正し、「知識や表現」の中味を母性の力と視点で作り変えていこうというのが、フェミニズムの視点にたつ女性学Women's Studies構築の運動である。だから女性学的研究の担い手は、いわゆる専門家である必要はない。むしろタコツボ化され難解なコトバしか使わない専門家は有害でさえある、というのは今や共通の考え方になっている。

6月に発表された国連の「世界の女性－1970～1990」では、読み書きの教育すら受けられない女性が、アジア・アフリカの全女性の4分の3に及ぶと報告されている。もちろん、国や階級、民族等により違いも大きいですが、アジアの多くの女性が自らの生活や社会的地位を向上させるための機会を奪われている現実がある。これらの女性についての問題や、他方ではそうした困難の中でも女性が発揮しているバイタリティについて、「アジア女性会議－北九州」で話し合われることを期待したい。私たちに何ができるか、を含めて。

ところで、フォーラムのこうした活動が、新たなネットワークを生んでいる。昨年設立された「東アジア学会」とのつながりである。EC統合や東欧・ソ連邦の社会主義体制の崩壊後の世界システム再編の動きの中で、東アジアでの求心力が急速に強められつつある。環日本海や環黄海経済圏の構想がそれである。東アジア学会では、この地域交流が、日本主導や経済中心でなく、対等なパートナーシップ、文化の相互交流を同時に行うことの重要性が強調されていた。中でも、当フォーラムの三隅専務理事が司会をし、私を含め女性だけ4人のパネリストによる「アジアの女性労働者と私たち」という学会の公開シンポジウムでの議論は、人権の均等や平和の追求、そして何より経済的格差の解消を共に考えるべきだという視点を参加者全体に与えたと思う。経済交流に関する翌日のシンポジウムで、ある財界リーダーの方が、人権への配慮や格差是正の交流を考えたいし、それは可能だ、と発言されたのが心に残る。

アジア女性交流・研究フォーラム
主席研究員 篠崎 正美

INFORMATION

●第2回アジア女性会議—北九州

「第2回アジア女性会議—北九州」が12月1日(日)～12月2日(月)に北九州国際会議場で開かれます。

この会議は、アジア女性交流・研究フォーラムの「交流」と「研究」を統合する主要事業の一つとして開催するものです。

2回目の今回は、「政策決定における女性」をメインテーマに、アジアにおける完全な男女共同による政策決定の実現に向けて、その課題と解決のための方策を考えるとともに、「開発と女性」について多角的な視点から討論を展開します。

特に、シンポジウムでは、国際的に活躍中の女性政治家の皆さんを国内外からパネリストとして迎え、女性の地位向上について幅広い考察を行います。皆様の参加をお待ちしています。

12月1日(日)

14:00～16:00 ワークショップ

16:00～17:30 市民交流会、バザール、アジア写真展

17:30～21:00 日韓共同研究報告及び国際シンポジウム

〈パネリスト〉レティシア・シャハニ上院議員(フィリピン)

スパトラ・マスディト前総理府大臣(タイ)

森山真弓参議院議員、久保田真苗参議院議員

末吉興一北九州市長 ほか

〈コーディネーター〉野中ともよ(ジャーナリスト)

12月2日(月)

9:30～15:30 研究と討論(自由発表部会、テーマ部会)

参加申し込み、お問い合わせは、フォーラム(093)551-1220まで。

●“Asian Breeze”定期購読受付中

“Asian Breeze”は、北九州市広聴課、各区市民相談室などで無料で配布しています。また、ご希望の方には、直接郵送による定期購読を受け付けますが、この場合は送料をご負担いただきます。

お申し込みは、フォーラム(093)551-1220まで。

※Asian Breezeに対するご意見やご感想をお寄せください。

※掲載記事などの無断転載・複写を禁じます。

●婦人問題に関する国内本部機構 上級担当官セミナー

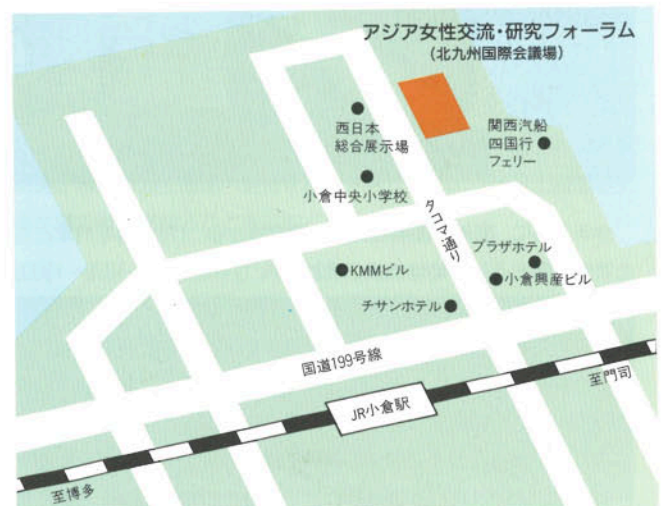
フォーラムの高橋久子理事長は、10月9日、婦人問題に関する国内本部機構上級担当官セミナーで、アジア諸国の婦人問題担当官に対して講義を行いました。このセミナーは、総理府と外務省が、国際協力事業団の研修員受入れ事業の一環として行っている事業です。アジア地域の婦人関連施策の担当機関である国内本部機構の上級担当官が参集し、各国の婦人問題について情報交換を行うとともに、今後の行政を推進するためのノウハウを研修するもので、今年は、11か国から13人が参加しました。

高橋理事長は、「地方公共団体におけるWID(開発と女性)への取り組み」と題して、北九州市の女性行政施策やフォーラムの活動を紹介しました。中でも、WIDへの取り組みの第一歩であり、かつ最も重要な要素は情報の共有であると強調し、各国との情報ネットワークの形成を呼びかけました。

編集後記

すりぬけていく風が、ちょっぴり人恋しい想いにさせる季節、フォーラムは設立1周年を迎えました。

多くの人との出会いがあったこの1年の間に、アジアの国ぐにがととも身近な国となりました。Asian Breezeに帆を上げて、21世紀に向かって一緒に航海を続けていきませんか。 〈K〉



アジア女性交流・研究フォーラム

〒802 北九州市小倉北区浅野3丁目9-30 北九州国際会議場8F
PHONE(093)551-1220 FAX(093)551-7535